

六甲ケーブル (六甲ケーブル下駅・ケーブルカー車内・六甲山上駅)

① A Day in the Life



鹿嶋理英子 Rieko KASHIMA

依頼を受けて、神戸の町を歩きはじめました。アポイントメントを取ったり、紹介頂いたりした意図的な出会いも含めて、ある一日のその場所が、長回しの映画のイメージのように過去や未来へと自由に膨張していく特有の感覚は、そこに居合わせた人たちによるまったくの偶然性に支えられたものであって、その一回きりの冗長な物語を私は本当に気に入りました。重く厄介な季節に写真に写って下さった皆さま、心から有難うございました。

天覧台／TENRAN CAFE

② キオクノカナタへ



清水千晶 Chiaki SHIMIZU

東日本大震災を機に、ファッションを通じて環境や人権問題について深く考えるようになりました。人間の美しく華やかでありたいという欲望は生きる上でのエネルギーとなり、それはファッションの面白さに繋がりますが、同時に衣服からは多くの廃棄物が発生し見た目による差別が生まれます。そうした人間の持つ矛盾や葛藤と向き合いながらアーティスト、デザイナーとして「ファッションとは何か？」と常に考えながら制作しています。

記念碑台（兵庫県立六甲山ビジターセンター）

③ かすむ



鐵羅佑 Yuu TETSURA

霞、微、幽。霞みのかかる山の中で微かな存在になりつつあるカスミサンショウウオ。山椒魚は生来きれいな水にしか住めないとされており、山椒魚が存在することが水がきれいであるという証明となる。幽かな存在となってしまう前にその生命の大きさを再認識し、六甲山の自然環境をより意識するもの。

普段から溶接痕を用いて鉄の表情を普段見ないような姿に変えることをしてきた。普段は見られない大きな存在感とともに鉄の面白さを感じて欲しい。

④ 煌めくモノ



イムラアヤコ Ayako IMURA

自然溢れる場所にいと、何とも言えぬ不安感に襲われることがある。そして六甲山は人が手入れし、管理している山であることに私は安心感を覚えた。

その事を制作の出発点にしました。

この作品《煌めくモノ》では、自然の中に人工物がある違和感を強調しています。

この違和感はここに人がいた痕跡です。

1つ1つ私の手によって貼り付けられたスパンコールが、キラキラと輝いてこの違和感を煌めかせたいです。

六甲山サイレンスリゾート

(旧六甲山ホテル)

⑤ みんな違う



岩谷雪子 Yukiko IWATANI

コロナなど関係なく、季節は巡り、植物たちは彼らの命を繋ぐ営みをいつもと変わらず繰り返しています。植物たちの美しさや形状の面白さは、実は彼らの生きる手段でもあります。足元の雑草や六甲ではよく見かける植物を乾燥させ工芸的な作品に仕上げたり、太陽光の熱で動いてガラスから自ら飛び降りる種子を窓辺に置くなど、六甲で採集した植物たちの美しさや機能をクローズアップする作品を展示しています。

⑥ 青い城



河原雪花 Setsuka KAWAHARA

ワルシャワのヴィスワ川の底で人魚は青い城を集めている。誰かの夢である青い城は美しくも脆く、時間が経てば朽ち果て、ある時は破壊されてしまう。ポーランド人のシシィと、日本人の蘭は人魚に導かれ、川の底、夢の世界で出会う。孤独な彼女らが抱えるものは時代や場所が違えども重なりあい、深く深く沈む。

本作はポーランドのお伽話「ワルシャワの人魚」と作家L・M・モンゴメリが執筆した同名の作品『青い城』を元になっている。

ROKKO 森の音ミュージアム

⑦ 101



寺岡波瑠 Haru TERAOKA

近代的合理性に貫かれた世界の中で、建築において一般的に遂行される様々な慣習や様式といった既成秩序や、建築物が取り壊される際のコンテクストに対する不条理性について疑問を感じ、日々制作している。
今回は、六甲山の栄枯盛衰の歴史において重要な存在であった別荘建築に注目した。
六甲山で最初の別荘建築は、英国人貿易商によって池畔に建てられたもので、101という愛称で呼ばれていた。
しかし、その建築物は現存していない



⑧ DECAP Revolution 他



明和電機 MAYWA DENKI

80年前の巨大なオルゴールの心臓部である「パンチカード」をコンピューター制御に置き換えることで様々な曲が演奏できるようにしました。
オールドテクノロジーがニューテクノロジーと合体することで愉快に復活!!

⑨ 光彩



松田美由紀 Miyuki MATSUDA

テーマは、『ジェンダー』。ジェンダーとは社会的、文化的に作られる性別のことを指し、いわゆる男性らしさ、女性らしさと表される性差のこと。
早乙女君は男性の性ですが、柔らかさ、美しさの表現は性別を超えたところにあり、佇まいだけでその人の悲しみも喜びも表現してくれました。
私たちは性別関係なく感情があります。その両方の性質がどんな人も、交互に現れ生きている。そこに隔たりはないのです。自分の心のバランスとは？

⑩ 祝祭



高井碧 Midori TAKAI

低い温度の風、木々の合間から降る透き通る光、シャワシャワと葉っぱが重なる音、土の湿り気、山の自然は大きな生き物のようだ。私はそれらを縁取り、時にはそこにいる花や植物の形を借りて、目には見えないもの、記憶、感触を呼び起こしたい。六甲は、昔から自然と人が共に歴史を紡いできた場所だ。自然がまるで人間のように、パーティーを開催している様子を描くことで、六甲の自然が人との共存を祝福している姿を、親しみと未来への祈りを込めて描く。

⑪ ひかりの実 in SIKI ガーデン



高橋匡太 Kyota TAKAHASHI

一つひとつの「ひかりの実」の向こうにある
大好きな人の笑顔を想う優しい気持ちにふれて下さい。

⑫ Get wild!!



三松拓真 Takuma MIMATSU

六甲山は昔から家族でよく訪れている、私にとって思い出深い場所です。そして訪れるたびに父が昔、六甲山でガードレールにぶつかる事故をしてしまった話を聞いていました。今回の作品はその父の体験を元になっています。ぶつかった車がそのままガードレールを突き破り、野生に帰っていった姿を作品にしています。車たちと同じように、突き破られたガードレールを入り口にして、展示を見ると、より楽しんで頂けると思います。

六甲高山植物園

⑬ mother's murmur



キリコ Kirico

私は女性として生きていくなかで感じる個人的な悩みをテーマとして作品制作を行ってきました。

今作は母親が準備しなければいけない「通園グッズ」について、自身の経験や感じた矛盾をテーマの根源として作品化させたものです。これらの作品を通して、今日の母親やそれを取り巻く環境、社会に根付いた「母性」の意味を改めて捉え直したいと考えています。

【作品に対する注意点】

→ぜひブラックライトで作品を照らして鑑賞してみてください。

確かに存在しているのに、見えていなかったことに気づくかもしれません。

※使用後は必ず電源をOFFにして所定の場所にお戻しください。

⑭ 植物の事を想う パッチワークの赤い家 どんぐりとぼく くまたちの家 みどり ピンクの犬とくま きつと妖精 日曜日の朝ごはん 真夜中のポニー 春だね 秋だよ STUDY



長井朋子 Tomoko NAGAI

六甲山、植物園での展示という事で、自然に対する想いと、“小さな家”（植物園屋外に展示）を連想させるようなイメージも込めて制作しました。

大きな作品“STUDY”は、秋の植物に囲まれてとてもドラマチックなシチュエーションの中、女の子が本を読んでいます。

タイトルのSTUDYには、自然や植物から教わる色々に対しての意味も込めました。

⑮ Glow with Night Garden Project in Rokko 提灯行列ランドスケープ 2021



高橋匡太 Kyota TAKAHASHI

皆様の持つ提灯の色はこの花々をイメージしました。
素敵な音楽のしらべと僕のライトアップと皆様の咲かせる
灯りの花々が共鳴し今宵美しい夜景が現れます。

⑯ 小さな家



長井朋子 Tomoko NAGAI

“小さな家”というタイトルの作品を作りました。
“家”は、自分の作品によく登場するモチーフのひとつです。それぞれ
誰かの想いや暮らしが箱の中に入ってる様な、ひとつひとつにカラーが
あり物語があるのを想像すると楽しいです。

今回の“小さな家”は、本当の家の様でもあり、ドールハウスにもどこ
か見えたり。ガラス張りでスケルトンの部分もあるので、覗く角度によっ
て色々な表情がみれると思います。また、少し離れて家全体をみると、
ガラスからみえる植物園の木々と一体に見えて、外なのか中なのか。不
思議な見え方を楽しんでいただけたらと思います。
家の中にいる色々な生き物達は、家主の帰りを待ちながらお留守番をし
ているのかもしれない。

⑰ Days



前野めり Meri MAENO

感染症が猛威を振るう中の制作、そして展示への迷いの中
それでも日々は続き、個人的なケガや新たな家族との生活があった
刺繍は毎日の記録、日記のように存在する
いつもは形を成すものを刺繍で縫ってきたが
「Days」の制作にあたり、ただ無になって針を進めた
一日を耐えるように制作したものが
すぐに風化していく恐ろしさも含めて
自分がここにいたことの証明としての作品です

⑮ 僕の話



穂波梅太郎 Umetaro HONAMI

不要不急を控える潮流の中あなたはどんな言葉を選びどんな話をしましたか。

大切なことを伝えるための会話は大切です、しかし同じように雑談も大切です。

他愛もない話がしたい、ふと思いついた話がしたい、そんな何気ない会話が弾むような空間を作りたいと考えました。

縦置きの本は開閉することができます。中には会話をテーマにした作品を配置しています。

ぜひ本を開いておはなしをお楽しみください。

③② 愛をこめてひょうたんを～鏡瓢水月～



松蔭中学校・高等学校 美術部

Shoin Junior and Senior High School Art Club

有馬温泉に流れる有馬川・ねね橋から突如姿を消した「愛をこめてひょうたんを～青春～」。

若気の至りのその末に、流れ着いたのは六甲山。池畔に逆さに立つひょうたんの半分は、水面に映るナルキッソスの鏡像となり、実像と合わさるように立ち上がります。炭酸せんべい模様に埋め尽くされたひょうたんの花言葉は「幸福」、「夢」。そのスキマを埋め尽くす花模様はオクラ、花言葉は「恋の病」です。青春は一体どこへ向かうのでしょうか。

旧パルナッソスの休憩小屋

①⑨ 山々を泳ぐ方舟



パルナッソスの池

(浅井裕介・高山夏希・松井えり菜・村山悟郎)

Pondparnasse (Yusuke ASAI, Natsuki TAKAYAMA,
Erina MATSUI, Goro MURAYAMA)

山々は時を超えた想像力を隆起させる。私たちが立つ六甲山は、いつからこの姿で、いつまでこの姿であろうか。しかし、人間による開発のモダニティは、山々を一時の対象としてきた。摩耶山で90年の月日をへて廃墟と化した旧摩耶観光ホテルは、山地開発の限界を示しつつ、次なる景色も喚起する。大洪水でパルナッソス山へ流れ着いた方舟が生命の源となったように。時流に洗われた廃墟は、来たるべき棲まうものたちを待っている。

GREENIA 外周フェンス

②⑩ ひとりオリンピック



しみずきみこ Kimiko SHIMIZU

オリンピック選手には、絶対に参加出来ない年齢の私ですが、写真の中では表現出来ると思います。自宅の一室で身近な物を使い、スポーツウェア、道具は仲間に借り無い物は手作りしました。セルフスイッチを持ってセルフポートレートで撮り、いろいろの種目を駆使して撮り続けました。六甲の山頂で、オリンピックが開催されている様に表現出来ればと思います展示しました。

六甲ガーデンテラスエリア 自然体感展望台 六甲枝垂れ

②① 種々多様



勝川夏樹 Natsuki KATSUKAWA

本作品は、種子の殻を模った大型のガラスオブジェと、点在する種子を模した小作品によって構成されています。これらの作品は六甲山や六甲高山植物園の植物の形態から着想を得て制作しています。種子の殻から、様々な形状の種子が周囲にばら撒かれたように展示する事で、種の多様性の大切さや、植物の生命活動の尊さを表現したいと考えています。希少な高山植物が分布する六甲山で、実りの時期にこの作品を展示する事が出来て嬉しく思います。

②② 無題



飯沼英樹 Hideki IINUMA

木彫の女性を三点展示する。
現代に生きる女性たちが、強く美しく生きる姿を、華やかな洋服とともに表現しています。古典的な木彫の伝統技法にカラフルな彩色をほどこし、動きのあるポーズで躍動感を表しています。

②③ はぐくみのみなもと



佐々きみ菜 Sasakimina

この身体を得る前のことを思う
柔らかな水の中に浮かび ただそこにいた

《源から広がって巡る》を繰り返し
始まりも終りも知らずに ただうごいていた

命の限りつづくこの営みがいつ終りを迎えるとしても
くいくわれる自然のことわりの中で
ここに生まれる 小さな命を育み 慈しむ

かつてここにいた命たちと
はぐくみの余地を忘れて生きる命たちに
届かない熱と このむねの内に祈りをささげる

②④ ちゃぶ台会議～地球は今も蒼いのか～



作田優希 Yuki SAKUTA

ちゃぶ台は私の人生の中で最も身近な集いの場所でした。初めて六甲山の歴史を振り返った時、此処にはこれからの地球と生きていく道標があるように感じました。環境問題や自然災害、そして新型コロナウイルス感染爆発などが蔓延る今の地球との共存について、話し合える場を作りました。このちゃぶ台は、人だけでなく多くの生き物の集合地点です。天板に描かれた絵画は上空からも見つけられるよう、目印の役割も果たしています。

②⑤ Rokko Six Sisters



藤田淑子 Yoshiko FUJITA

私は、主に顔面にカーテンのかかった少女をモチーフとした制作を続ける作家です。カーテンで覆われた顔は、明確な表情の間にある微妙な瞬間を捉え、鑑賞者の心を写す鏡にもなります。

この度、六甲山の花を自らの芸術表現で形にしたいと考えました。少女の姿をした妖精に擬え、自然の強さや美しさに生かされる私たちの存在を写しました。

表情の見えない妖精との精神の対話が、六甲山を歩く人の心を豊かにしてくれることを願います。

六甲有馬ロープウェー六甲山頂駅

②⑥ ストリート・トイピアノ＆六甲山トイトレッカー合唱団



土谷享 (KOSUGE1-16)
Takashi TSUCHIYA(KOSUGE1-16)

マスクを外して歌うことも憚れる昨今、開放的な気持ちになろうとトレッキングする人も多いと思います。そこで出会って欲しいのがこの作品です。ストリートピアノ同様、小さなトイピアノで音楽を奏でれば、周囲からの注目の的となりますが、いつものそれとは異なる点があります。それはトレッカーの彫刻達が歌うという事です。彼らにマスクは不要。さあ張り切って歌わせてください！

グランドホテル六甲スカイヴィラ 風の教会エリア

②7 See Saw Seeds Distance ROKKO CHANG PONG



C.A.P. (特定非営利活動法人芸術と計画会議)
Videokaffe
Galerie Herold

See Saw Seeds では異なった文化にあるアートグループが協働する。今回はトゥルクを拠点に活動する 10 人のアーティストネットワーク：Videokaffe、プレーメンの巨大芸術施設内でギャラリーを自主運営する 12 人のアーティスト、そして神戸の C.A.P. が、六甲スカイヴィラ迎賓館を小さな美術館にします。12 のキーワードを出発点に、3 つのグループから 44 名のアーティストがごちゃ混ぜになって制作を進めました。来日が不可能になった時、色々な国からメンバーがオンラインで共同作業を続けている Videokaffe は、Jamboard というネット上のホワイトボードを使って進めようと提案。「え？それ何」とたじろぎつつも使い始めたら参加人数が多すぎて破綻。するとプレーメンから Miro を提案。Jam から Miro、メールや zoom と 44 人が右往左往し、誤解や進路変更を繰り返し、もう誰がどのグループの人かわからなくなりました。これはハードルの高い、同時にとても楽しいワークショップ。きっと更に何かが育っていくこの大きなちゃんぽんを是非楽しんでください。

■ 写真

- 上) C.A.P. (特定非営利活動法人芸術と計画会議)
- 中) Videokaffe
- 下) Galerie Herold



②⑧ 我々は神ではない



本濃研太 Genta HONNOH

僕は神様はいないと思います。もしいたならば起こらないであろうことがけっこう平気で起こります。しかし、世界各地には古代からたくさんの神像があり、先人たちが「人間を超えるものの姿」を創り出そうと奮闘したその形や色はとても魅力的です。それを作りだした人々は確実にいました。そんな神像たちを尊敬と憧れを持ち、その要素を取り入れ制作した彫刻を並べ、神様ではなく人類の想像力と創造力を讃える作品です。

②⑨ 牧場イメクラ『六甲山からの贈り物』



大木土木と ... OOKIDOBOKU and...

六甲山は昔より関西の人々に愛され、自然の恵み、レジャー、スポーツなど多くのものを提供してきました。それはいわば、『六甲山からの贈り物』だと解釈できます。

この展示は、日本の贈答の様式で使用される『のし紙』をモチーフとしています。六甲山の自然に『のし紙』を造形する事で、空間に意味と違和感を生じさせ、コロナ禍において大きく変化した生活の中、自然や時間、そして自己や他者に対しての関係性を再考するきっかけの場となる事を目的としています。

③⑩ オクユク



束芋 Tabaimo

教会に天井画を描く。教会の物理的な空間は限られているが、天井画はその空間を延長する役割を持つ。

《風の教会》は装飾を排することで外部からの風を取り込んでいくような、懐の深さを感じる。その深さに触れた時、私のような信仰を持たない者をも受け入れてくれるような温かさを感じると同時に、底知れない怖さを感じる。

怖さを克服するために相手を知ることは、有効な解決策の一つであると思う。

教会はしばしば肉体に見立てられる。教会の中に立つ自分の肉体を想い、答えを探してみる。

有馬温泉エリア

- ③① 忘れ物 (親水公園)
陽気な色彩 (金の湯前)
混沌 (太閤の湯前)



松本かなこ Canaco MATSUMOTO

忘れ物

今に追われ、ともすると忘れてしまう。坂道の途中で立ち止まり、なんだったっけ、を思い出せる場所に。

陽気な色彩

たくさんの人が通り、留まる場所。

混沌

お湯が湧き出て、水が流れて、子ども達も元気な町。

③③ Along a long ARIMA



中根千枝・内田結花 Chie NAKANE・Yuka UCHIDA

有馬温泉各所を巡る〈周遊型展示〉と、その各所を巡ってつくった〈ダンスの上演〉をまるっとひっくるめたものが本作「Along a long ARIMA」です。はじめは、滝見茶屋のすぐ側を流れる鼓ヶ滝の二次元コードから。スマホのカメラをかざし、有馬温泉の5つの場所と、その道中にひっそり潜む本作のかけらを辿っていただければと思います。

③④ おねすと



佐藤圭一 Keiichi SATO

私にとって作品とは自己表現というよりも「勝手にそこにいるモノ」という感覚を強く持っています、制作したのは確かに私なのですが、その事とは別に特に展覧会などでは強くそう感じてしまいます。多彩な風景要素や情感豊かな有馬温泉の空気の中でノビノビと贅沢な時間を過ごしている「彼ら」を羨ましく思うのは可笑しいことでしょうか？